
Live...

yu-

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Live . . .

【Nコード】

N9022X

【作者名】

yu -

【あらすじ】

『——私の人生は、つまらない人生。』喉に病気を患って、好きな歌を存分に歌えず、友達までも失った少女、桐島 優花。『——この声が届くまで、みんなの為に歌い続ける。』歌手になって約1年、喉に病気を患ってもなお、大好きな歌を歌い続ける少年、泉 莉央。これは、同じ病を患いながら全く違う道を歩む、2人の話。

「楽しい毎日になる筈だった…」

これからだった。

これから、ずっと。

大人になるまで…ただ、歌を歌い続ける筈だった。
デビューしてからやっと1年経とうとしていた。
これからが頑張りどころだった。

「でも…限界だった…」

この喉が、全てを終わりにしようとしていた。

少し前に、喉に痛みを覚えて、病院に行った。

今の俺の声帯は、手術をしないで放っておいたら、後一年で使い物
にならなくなるらしい。

喉にできた腫瘍が、俺の声帯を蝕んでいると言われた。

手術をすれば、命に別状はない。

でも手術をしたら、声が出なくなる可能性があると言われた。

だから俺は、ギリギリまで歌うことを選んだ。

痛みに耐えながらもいい、俺たちのファンでいてくれる、みんな
のために、歌いたい。

たとえ声が出なくなっても、俺は、悔いは残らないように歌
っていたかった——…。

- 9月2日 優花の家 優花の部屋 -

朝：カーテン隙間のから眩しい光が差し込み、私を照りつける。
眩しくて、目を覚ました。

眠い目を擦り、廊下に出て、部屋から一階まで続く階段を下りた。
リビングには母がいて、朝食を用意してくれていた。
妹の花梨はすでに起きていて、テーブルの前にある椅子に座り、朝食を食べている。

「おはよう…お母さん…。」

「おはよう優花^{ゆか}。早く食べて、支度終わらせなさいね？」

「うん…いただきます…。」

私も椅子に座り、朝食を食べた。

朝食を食べると、学校に行く準備を始めた。

「行ってきます…」

そう言つて制服を着た私は家を出た。母は『いつてらっしゃい』と、笑顔で見送ってくれた。今日は、暑くもなく寒くもない日だった。足取り軽く、私は駅に向かっていた。

私の通っている高校は、多美丘高校。学力、評判共に普通な高校。

特に目立った騒動や事件は起こっていない。結構、平和な高校だ。

今日も、そんな高校に向かっていた。

- 多美丘駅へ向かう電車 車内 -

ガタンゴトン…ガタンゴトン…

暇な時間を潰すため、電車で揺られながら、音楽を聞いていた。

“Rosa”というビジュアル系バンドの曲。

このバンドはかなり人気があり、花梨のオススメでもあるらしい。声や歌詞、曲調、確かに良かった。

ビジュアル系バンドにはあまり興味はなかった私も、このバンドの曲には興味を持った。

- 多美丘駅 -

音楽を聞いていると、いつの間にか駅に着いた。

私はイヤホンを外し、電車を降りると改札口へ向かい歩き出した。ここ、多美丘駅は通勤の為に使われることが多く、利用する人が多い。

朝と夜は完璧に混むため、凄いことになる。

そんな多美丘駅の改札口を通過し、高校に向かって歩き出した。

- 多美丘高校 -

高校に着き、私は靴を履き替え、2年A組の教室に向かう。

教室はいつもと変わらず賑やか。

女子達は、例の“Rosa”の話題でやけに盛り上がっている。

どうやら、中でも一番人気は、ヴォーカルのIZUMIという人物らしい。

実際、私にはIZUMIという人物がどんな人か、よく分からないけど。

「……朝のホームルームまで、あと1時間……」

私は騒がしい教室は嫌なので、いつものように図書室へ向かった。

相変わらず、生徒に使われていない静かな図書室。
でも、掃除はちゃんとしてある。

私はそんな図書室の窓から外を見るのが学校での日課。
校庭には、朝練をしているサッカー部やテニス部が熱心に練習をし
ている姿があつた。

私は部活は無所属。

最も、やりたい部活がない。

放課後はすぐに帰るか、ここで外を見ている。

——熱心に何かをして、何か得をするのか。

私はもう、何もかも諦めていた。

一年後に、必ず手術を受けなければならなかった。

喉にある腫瘍が、声帯を蝕んでいるらしい。

知った時、怖かった。

手術をすれば、命に別状はないと言われた。

ただ、手術をすれば、声を失う可能性が高いと言われた。

大きい声を出すと、喉に痛みが走り、咳き込んでしまう。

今はそんな状態のまま生活していた。

普通に話をしていても、喉が痛む時も多々あつた。

正直、苦しい。

でも、私は声を失うのは嫌だった。

私は歌を歌うのが好き。

別に歌手になろうとは思えないけれど、ただ、歌を歌うのが好きだ
った。

「人はいつかは変わるもの…」

でも、どうして私はこんな変わり方だったのか。
運命を呪うつもりはない。

誰かを責めるつもりもない。

だけど、少しだけ辛かった。

そんな自分の運命が。

声を失う事が、怖かった。

朝のホームルームが始まる20分前。

そろそろ戻ろうかと思った時だった。

図書室の押して開けるドアを開け、誰かが入ってきた。

見るとそこには、制服は多美丘高校のを着ていたが、見知らぬ男子
が先生と一緒にいた。

妙に綺麗な顔で、程よく背が高くてイケメンでもあり、美しくも思
える外見だった。

そしてその隣にいる先生は、私の隣のクラス、2年B組の担任をし
ている女性だ。

「あら？優花さんがいたのね？」

「…どうかしたんですか…？」

「転校生さんを、避難させておこうと思ってね。」

「避難…？」

そう言えば昨日、転校生がどうか言ってた。
こんな人が転校生なら、女子が騒ぐに決まっている。
だから、避難なのか。

「泉君、ここにいてね？図書室から出ちゃ駄目よ？」

「わかりました。」

先生は小走りで図書室を出て行つた。
静まる図書室。

「……………」

「……………」

私はまた外に視線を戻した。

「なあ…………外見てて、楽しいか？」

「…別に……………」

「じゃあ、何で見てるんだよ？」

「…………別に…意味はないわ……………」

そう言つた私の隣には、いつの間にか転校生の姿があつた。
なんとなく私は転校生の方を見る。

近くで見ると、本当に肌が綺麗でイケメンなその人。

さっきまでの私と同じ様に、窓の外を眺めている転校生は仄かに、
香水のような良い匂いがする。

「……………」

転校生は私が見ている事に気付いたようで、こちらを見た。

「私に近寄るなって言いたいの？」

私は目を合わせたくないが為に、また窓から外を見る。
転校生は隣でクスクスと小さく笑っていた。

「お前、何年？」

「……2年。」

「ふうん……………」

「……………」

「……………」

また訪れた沈黙。

私は少し気まずい雰囲気になった図書室を出ようと思い、出入口
に向かった。

「教室戻るのか？」

「……戻る。」

「そっか。」

「……………」

私は転校生を一人残し、図書室を出た。

- 2年A組 -

朝のホームルーム開始5分前。
私は席についた。

未だにガヤガヤしている教室。

話の話題はやはり例のバンドの話らしい。

あの人がカッコイイとか、あの人が好きとか…そんな話をしていて
楽しいのか。

私には、楽しいとは思えないけど。

「ねえねえ優花ちゃんっ♪」

「……………」

前の席の子に話しかけられた。

この子の名前は、中澤美樹。

たまに話をする程度で、友達と呼んでいいのか正直分からない。
私を知る限り、明るくて良い子だけど。

「今人気のビジュアル系バンド、知ってるよねっ?」

「…バンドの名前と、曲くらいなら…」

「そのバンドのヴォーカルのIZUMIがね、多美高に来るらしいよ！転校生として！」

多美高とはおそらく、ここ、多美丘高校の略。

一体どういった経緯で、そんな情報を得ているんだろう。

「……転校生としてって、言った…？」

「うん、言っただけ、それがどうかした？」

転校生としてってことは…まさか、図書室にいたあの人がIZUMI
Iって人？

でもそう言われれば、あの妙な綺麗さとか説明がつく。

そんな事を考えているうちに5分経ってしまったのか、先生が教室
に入ってきた。

2年A組の担任はまだ二十代の男性で、名前は、にしはら あきのぶ西原彰信先生。
ほとんどの生徒が、西原先生と呼んでいる。

「さあ、ホームルーム始めるぞー。」

「じゃあ、先生からの話だ。今日、転校生が来るのは、みんな知っ
ているな？その転校生は、有名人のIZUMIだ。しかし。だから
といって、サインを貰いに行ったり、握手してくれだの何だのとは
言わないように。」

西原先生の話に、生徒たちは不満そうな声を上げていた。

ホームルームが終わり、先生が職員室へ戻っていき、10分間の休憩に入った途端だった。

教室にいた私以外の生徒たち皆、2年B組に行った。B組からは、賑やかな声が響いてくる。

「……………」

その時間、私は一人、本を読むことにした。

それから、休憩時間が来る度に、生徒たちは転校生のもとに行っていた。

転校生も大変だろう。

有名人は大変だと、改めて実感した。

- 放課後 多美丘高校 図書室 -

ただ、外を眺めるのが私の日課。

いつも一人、外を眺める私。

でも、今日は一人ではなかった。

朝に会った転校生が、図書室に来たからだ。

また隣に立って、私と同じ様に外を眺めている。

「なあ……外見てて、楽しいか？」

「…別に……」

「朝と同じ答えだな。」

「…貴方、何でこんな所に来るのよ……」

「…その言葉、そっくりそのまま返してやる。そっちこそ、何でこんな所にいるんだよ。目的もなく、ただここで外見てるだけなのか？」

「……どうして知りたいのよ……」

なぜか正直に答えたくなくて、そう聞き返す。

「んー、別に意味はないけど。」

「…じゃあ聞かないで。」

「冷たいなあ…俺と一対一で話できる奴、そういないのに。」

「…別に…貴方に興味ないから………」

「あははっ、ひどい言い方。」

「……私になんかかまってないで、他の子と話していればいいじゃない……。」

「あれ、俺の事嫌い？」

「…………別に……」

「じゃあ好き？」

「…………嫌い……」

「あれ？別に、じゃなかったの？」

「…………大嫌いよ……」

転校生はそれを聞くとクスクスと笑った。

「お前、部活やってないの？」

「…………やってない……」

「なんで？」

「…………やりたい部活、ないから……」

「へえ……」

「………………」

「………………」

沈黙が訪れた。

二人で外を眺めている。

周りから見たら、これは変な光景なのだろうか。

「あ……そろそろ時間か。」

本の貸し借りをするカウンターのすぐ後ろの壁にかけられている図書室の時計を見て、転校生はそう言った。

「……時間……？」

「歌の練習時間。そろそろ行かないと、集合時間に間に合わないから。」

ということは、やはりこの人がIZUMIという人だったらしい。

「じゃあ、また明日。」

「え……また明日の意味が分からない……」

「どうせお前、毎朝ここにいるんでしょ？だからまた明日の朝、ここにきてやるって意味。」

「来なくていいわよ……」

「会いたくないならここに来なければいいだろ？」

「……………」

またクスクスと笑う転校生。

確かに来なければいい話だけど……

どう答えて良いか分からない私を他所に、『また明日。』と言い残して、彼は図書室を去っていった。

明日の私は何をしているのか。

また明日学校に来たら、またここに足を運んでいるのだろうか。
多分…来る。

別にあの人に会いたいとは思わないけど。

多分、私はまた来るだろう。

明日もこの場所に。

静かで綺麗なこの空間に。

こうして立ちながら、この窓から外を眺めているだろう。

静かな図書室で、また一人になった私は、何もする事がなかったの
で、とりあえず家に帰ることにした。

- 優花の家 -

「ただいま…」

「お姉ちゃんおかえり!!」

帰ってきた私を出迎えたのは、いつも以上にテンションが高い花梨
だった。

こんなテンションの時は、決まって私になにかを頼んでくる。

「頼み事なら聞かないわよ…」

そんな私の言葉に、凶星だったのか不服そうな声をあげる花梨。

「おーねーがーいいっ!!お姉ちゃんにしか頼めないことなの!!」

どうせ言うつもりだろうから、聞くだけ聞くことにした。

「多美高にいるんでしょ、あのIZUMIが!!だから明日、IZUMIにサイン、貰ってきて!!」

変な頼み事に呆れた。

それよりも、どうして彼がいる事を知っているんだろう…

「ね!!約束だよ!!」

「……、忘れていなかったらね…」

私は必死な花梨に、呆れながらそう言うしかなかった。

「よっしゃあ!!」

花梨はそう言うのと二階に続く階段を駆け上っていく。

「……そんなに嬉しいことなのかな…」

私には、花梨の気持ちがよく分からなかった。

—サイン—

私はまた図書室に来て、いつものように外を見ていた。
まだ転校生の姿は、図書室にはない。

最も、来なくてもいいけど。

やっぱり私はこの場所が好きだからここに来てしまう。
この静かな空間が好きだった。

外を眺めていると、図書室のドアが開く音がした。

昨日の転校生だった。

「やっぱり来てる。」

「……悪い……？」

私はそう言っ窓の外に視線を移す。

転校生は『悪くないんじゃない？』と言ってまた私の隣に立ち、外を見る。

「あ……そういえば……」

私は制服のブレザーのポケットから花梨のメモ帳を取り出し、白紙のページを出して、ペンと一緒に転校生に差し出した。

「サイン、ちょうだい……」

「え、なにに？お前、俺のファンになったの？」

「勘違いしないで……これは妹のよ……。貰ってこいって言われたの……」

「へえ…お前の妹、俺のファンなの？」

「…そうみたいね…」

「ふうん…」

転校生はメモ帳とペンを受け取ると、そのまま動きを止める。

「……………」

「……………」

「…………お前ん家、行っている？」

「え…」

「別に中に入りたいとかそういうのじゃないんだけど…直接、会いたいな…って。」

「…………妹に…？」

「そう。」

「貴方、随分ファンサービスするのね…」

転校生はクスクス笑って『まあね』と言う。

「で、行っている？」

返事に困った。

花梨は喜ぶと思うけど、高校の女子に知れたら、どんな大事になるかは大体の想像がつく。
でも、花梨が喜んでくれるなら…

「……分かった…」

花梨が喜んでくれるなら、来てもいいと思った。

「よし、じゃあ今日な。」

「…今日の……？」

「そう。放課後、ここに集合…って、どうせ放課後はここにいるよね。」

「そう。放課後、ここに集合…って、どうせ放課後はここにいるよね。」

「…いて悪い…？」

「悪くないって。あ、そういえばお前、なんで学校にいる時、一人でいるの？」

「え…」

「昨日何回か見かけたけど、一人でいたから。」

「……あんまり…話をしてたくないから…」

「なんで？」

「それは……貴方には……関係無い事よ……」

私がそう言った時、チャイムが鳴った。

私は『じゃあね』と言い残し、一人、図書室を出た。

教室は今日も賑やか。

転校生の話をしている生徒がほとんどだ。

そんな話をして、何が楽しいのか分らない。

さっきまで前の席の子と話していた美樹さんが、いつものように後ろを向いて話をかけてきた。

私はなにも言わず、美樹さんを見る。

「優花ちゃんは、IZUMIにサイン貰った？」

「……貰ってないけど……」

「貰ったりしないの？」

「……私はそういうの、要らないから……」

「そうなんだ……。折角だし、貰っておけばいいのに……」

美樹さんがそう言った時、西原先生が教室に入ってきた。
日直の号令で、朝のホームルームが始まる。

ホームルームが終わり、休み時間になると、昨日と同じく、生徒達は隣のクラスへ飛ぶように向かっていった。
私は昨日と同じく、本を読むことにした。

- 多美丘高校 校庭 -

1時間目の数学が終わり、2時間目の体育の時間。
私は医者から運動はしないようにと言われているため、いつも見学をしている。

たまにライン引きやタイムを計ったりするのを手伝っている。

今日は何も手伝うことがないので、ただ授業風景を眺めていた。

毎日見学していても、周りから何も言われないのでなんだかほっとしている。

自由に動き回る皆を見ると、羨ましくなんかない…と、誤魔化したくなるほど羨ましく思ってしまう。

私からすれば、皆のいる世界は、すごく尊い世界なのだろう。

行けるか分からない…いや、戻れるか分からない世界なのだろう。

- 多美丘高校 図書室 -

いつもと変わりなく、静けさに包まれている。

まだ転校生は来ていないようだ。

私は、いつものように窓から外を見ていることにした。

少しの時間が流れ、ドアの開く音がした。

見てみると、そこには転校生の姿ではなく、美樹さんの姿があった。

「あれ、優花ちゃん？」

「あ……美樹さん……」

「やだなあ、美樹さんじゃなくて、美樹ちゃんでもいいってば。」

「……………」

「えっと……こんなところで、何してたの？」

「……本、読もうと思って……」

「え……でも、外見てなかった？」

「……空、綺麗だったから……」

私は、窓から空を見ながらそう言った。
でも今日の空は、本当に綺麗だった。

美樹さんは『確かに』と言って笑顔を浮かべた。

「優花ちゃんは、いつも一人だよね？どうして？もしかして人間嫌いとか？」

「……そういう訳じゃないけど……」

「じゃあどうして？」

「……………。美樹さんには、関係無いことだから……」

「むう…そっか……」

美樹さんはそう言っ、本棚から辞書を取り出すと、私に向き直つて、小さく微笑む。

「じゃあ私、辞書借りに来たただだから、行くね」

「……………うん……」

美樹さんは、小走りで図書室を出ていった。

「……………」

美樹さんは、明るくて良い人なのに、あんな言葉を返す事しかできないのが、少しだけ悔しかった。

本当の事を…本音を言いたいけど、この喉の事を知られたら、絶対に変な気を使わせてしまう。

だから、私は本音を言わない。

本当に信用できる人が出来れば、この心を縛り付けてる鎖を…本音を言わないようにしている鎖を、外す事ができると思うけど。そんな人、出来るとは思えない。

——きっと、いつになっても私は一人だろう…。

私は、また外を見ることにした。

しばらくすると、またドアの開く音がした。

見ると、そこには転校生がいた。

今の時刻は17時。

転校生は私の隣に立つと、『女子に捕まって遅くなった』と苦笑しながら言った。

「お前いつ帰るの？」

「別に……いつでもいいけど……私と歩いてたら……色々と面倒な事にならない……？」

「まあ、大丈夫だって。多分。」

「大丈夫じゃなかったら……貴方が責任とってよ……」

「はいはい。じゃ、行くか。」

転校生はそう言って歩き出した。

でも、私がついていけないので、転校生は立ち止まり、こちらを見る。

「どうかした？」

「やっぱり……貴方が先に多美丘駅まで行って……。私、ずっと後ろについてくから……」

「分かった。じゃ、駅で待ってるから。」

「…うん………」

転校生は再び歩き出し、図書室を出た。

「……………」

それから私は少しの間、外ではなく、空を見ていた。

- 多美丘駅へ続く道 -

俺は、どうしてあの女が気になるのだろう。

無愛想で冷たい態度をとるアイツが。

まあ、外見とか、顔は普通に可愛いけど。

『別に……』としか言ってくれないアイツが、なんで気になるのだろう。

女なら、どこにでもいる。

俺のファンとして接してくれる女とか。

可愛い女なんてそこら辺にもいるし。

でも、アイツは違う。

ファンでもなければ、自分から話をかけてこない。

俺はアイツの目に、どんな風に映っているのだろうか。

変人？それともただの男？ただの人間？

俺はそんな事を考えた後、小さくため息をつく。

「なんか……俺らしくない……」

なんでこんなにアイツの事、気にしているんだろう。

今回はアイツの頼みだけど、アイツの妹とかいうファンのために行くわけで、別にアイツの為に時間を割いている訳じゃない。

アイツはただ同じ高校で、同じ年齢ってだけ。

別に気にする必要はない……等。

でも、なんで気になるのか、分からなくもない気がする。

多分、アイツを変えてやりたいと思っているのだろう。

もっと皆と接してほしい。

もっと皆と話をしてほしい。

生きている事を、もっと楽しんでほしい。

そう思うから、こんなにも気にかけて、こんなにも話をかけてしま
うのだろう。

もしも病気になって、楽しい人生が送れなくなったら、アイツのよ
うな人間は、楽しむ術を無くしてしまうかもしれない。

だから、健康なうちに、もっと人生を楽しんでほしい……そう思う。

今の俺は、喉に腫瘍がある。

これはれっきとした病気。

だけど、病気だからこそ、一生懸命歌いたいと思った。

人生を楽しむ為に、今できる事……

俺にとってのそれは、歌を歌うことだから。

図書室の時計を見て、私はそう呟く。
もう少しここで空を見ていたかったが、空なら歩きながらも見れる
ので、今度は歩きながら空を見る事にした。

- 多美丘駅 -

駅に着いた。

辺りを見渡してみるが、転校生の姿が見当たらない。

「……………いない…?」

私がそう言った時、後ろからそつと肩を叩かれる。

見ると、誰だか分からない…：ような気もしたが、転校生だった。

「……………眼鏡…してた…?」

「俺がこついう場でそのまんまでいたら、どうなると思う?」

「……………一瞬にして…：周りが人間まみれだろうね…」

「だろ?じゃ、行くか。」

「…うん。」

私達はそう言って、改札口を通過して、電車を待った。

- 東多美丘駅 -

東多美丘駅についた。

この駅から私の家まで、徒歩20分程度だ。

転校生は『お前の家、ここの近くなんだ』と言っていた。

私はその言葉を聞き流して改札口を出て、家への帰路についた。

- 帰り道 -

何も話をせず、二人並んで歩いていた。

気まずくはないが、不思議な…なんとも言えない変な感じがする。

「なあ、お前ってさ。」

転校生がやっと口を開く。

私は転校生の方は見ず、『なに…?』と返す。

「名前、何て言うの?」

「……………」

聞かれて思い出した。

そう言えば、教えていなかった。

転校生にも名前を聞いていない。

でも、ほとんど名前を呼ぶような機会はない。

別に“貴方”と呼んでも、なに不自由なく話せる。

それに名前なんて聞いても、名前で呼ばないと思う。

「おーい」

「え…？」

私は転校生を見た。

転校生は呆れたようにため息をつく。

「え？つて…。名前、答えてよ。」

「……………今まで通り、お前って呼べばいいじゃない…。」

「いつまでもお前って呼ぶの、なんか嫌だから。」

私はそれを聞くと、なんとなく視線を前に戻す。

「……………桐島…。」

「…名前聞かれたら、下の名前答えるべきじゃない…？」

「……………貴方に下の名前で呼ばれると思うと…なんか…腹立つから…。」

「え…なんだよそれ…。」

「……ただの差別みたいなものよ……気にしないでいい……」

「差別って……ひどくない……？」

「……、貴方も言ってよ……名前……」

私が前を向いたままそう聞くと、転校生はすぐに答えた。

「泉。」

名字だけを。

「……人の事言えないじゃない……」

「俺、下の名前あんまり好きじゃないんだよね……」

「え……」

「女っぽい気がして。」

私は思わず転校生を見た。

一瞬、驚いた。

自分の名前を好まない人も、中にはいるみたいだ。

「……そう言われると……気になるわよ……」

私がそう言つと、転校生は小さく笑う。

「お前も教えてくれるなら、教えやるよ。」

「……………、優花……………」

私はどうしようか迷った末、答えた。
なんとなく…気になったから。

しかし、教えた後、やっぱり言わなくてもよかったんじゃないかと思っ
た。

「じゃあ、桐島優花っていうんだ。」

「……………悪い……………」

「悪くないって。俺の下の名前は、莉央。なんか、女っぽいだろ？」

泉 莉央…確かに、女性の名前に聞こえるような気がする。

「……………でも…変じゃないから大丈夫よ……………」

「そうかな」

「…うん」

私達はそれから何も話さなかった。

- 優花の家 -

家についた。

私の家は、普通の二階建ての家。
私は玄関のドアを開けた。

「ただいま……」

そう言うと、二階から、『おかえりお姉ちゃん!』と言って、花梨が駆け下りてきた。

「約束守ってくれた?」

「……連れてきた……」

私は転校生を見ながらそう言う。

転校生が花梨を見て、笑顔で『どーも』と言うと、即座に、固まったように動きを止めた。

「……花梨……?」

「お、おねえ……ちゃん……、この人……本物だ……本物のIZUMIだあつ! あわわ、どーしよう!! お姉ちゃんの馬鹿!! 連れてくるなら早く言つてよー!!」

「だって……この人が来たいって言ったから……」

「すっごーい!! どうしよう!! あ、ちょっと待ってて!!」

花梨は慌てて二階に駆け上っていく。

「……………」

「妹と性格正反対なんだな…顔は似てるけど」

「……悪い……？」

「悪くないけど…。ねえ？なんか俺だと態度冷たくない…？」

「……………気のせいよ……」

私がそう言った時、花梨が肩で呼吸をしながら戻ってきた。
手には、ペンと色紙を持っていた。

そして持って来たそれを転校生に差し出す。

「さ、サイン、ください！！」

「そんなかしこまらなくてもいいって。」

転校生はペンと色紙を受け取ると、サインを書いて花梨に渡した。

「わあ〜っ、ありがとう〜っ！」

花梨はそう言ってペンと色紙を受け取った。

「あの、どうせならお茶飲んでいつて？お母さんもそろそろ帰ってくると思うし。」

「いや、悪いし。帰るよ。」

「ええ〜……」

花梨が『お願い、お姉ちゃんも頼んで』と言わんばかりに私を見て

くるので、

「……、上がった……」

私はそう言った。

「え？」

転校生は案の定、呆然としている。

私がこんな事を言うのが、意外すぎたのだろう。

「……お茶、出すから……」

その言葉を繋げた私は靴を脱いでリビングに入った。

「……、上がった……」

「え？」

そう言われて、思わず言葉を無くした。

そう、意外すぎて。

まさかコイツ…桐島が、こんなことを言うとは。

妹には、すごく優しいんだろう。

「……お茶、出すから……」

桐島はそう言うと、靴を脱ぎ、リビングの方だろう、室内に入って

いった。

俺は、どうするべきだろう。

「ねえねえ、上がってってば〜！」

悩む暇もなく、桐島の妹が俺の腕を引っ張るので、仕方なく上がらせてもらう事にした。

- リビング -

桐島の妹にソファに座るように言われ、とりあえずソファに座った。

俺の前にあるテーブルに、桐島がお茶を持ってきてくれた。

なんか、申し訳ない。

今すぐにでも帰りたい気分だ。

ここにいたくない訳じゃない。

ただ、俺は桐島の妹に直接会ってあげたいから来たのに、上げさせてもらう挙げ句、お茶まで出されるなんて、申し訳ない気がした。

「ねえねえ、本名何て言うの？」

「本名？泉。」

「それ、名字だよね…じゃあ、名前は？」

「名前は……、あ……」

「ん？」

「ごめん、下の名前……ていうか本名は無闇に言うなって、ASA Iに言われてるんだ……」

そう、言うてはいけなかったのをすっかり忘れていた。

でも、高校の生徒達には名前を聞かれていなかったから言うてはいない。

だから――

「え……でも、どうせお姉ちゃんには言ったんでしょ？」

そう言われた瞬間、言葉に詰まる。

確かに、言った。

いや、そういえば言うてしまった。

桐島の事だ、周りに言い触らしたりはしないと思うけど、もし妹の方に知られたら……

「聞いてない。」

不意に、後ろからそう聞こえた。

言ったのは桐島だった。

意外すぎてなんの言葉も出ない。

「……ローマ字で、IZUMI、なら知ってたけど……」

「そうなの？ なあんだ……」

桐島の妹がそう言うと、玄関が開く音が聞こえた。

桐島の妹は『お母さんだ!』と言って玄関に駆けていく。

「…ありがとう。」

「……………別に貴方を助けたくて言った訳じゃないから…」

「え?」

桐島は俺を見ると、『後でしつこく問われるのが嫌だったから』と言う。

それが本当なのか本当ではないのか、俺には分からないけど、多分、本当にそんな理由でああ言っただろう。でも、案外優しい奴なのかもしれない。

「あら、いらつしゃい。優花がお友達を連れてくるなんて珍しいわね。」

桐島の母親が帰宅したらしい。リビングに入った早々に俺を見てそう言った。

「別に…友達じゃないよ…」

桐島は母親の言葉を否定する。

まあ、別に友達という間柄ではないから、当たり前な反応だろうか。

「あら、そうなの?でも、優花と仲良くしてくれているみたいだし、ゆっくりしていいね。」

「は、はい…」

……なんか、調子狂う…

それから1時間くらい、俺は桐島の妹と話をした。

- 東多美丘駅へ続く道 -

東多美丘駅までの道を、桐島と二人で歩いていた。

桐島が駅の近くにあるスーパーへ買い出しを頼まれたので、駅の近くまで一緒に向かうことになったからだ。

駅までは、徒歩20分といったところか。

まだ5分くらいしか歩いていない。

その5分間、何も会話をしないで歩いていた。

別に話したい事にもないし。

でも、無言というのもなんだか落ち着かない。

なので、話題を振ることにした。

「桐島はさ、友達作らないの？」

「……… 必要ないから…」

普段は何も言わないけど、話題を振ると、ちゃんと返してくれるのが、コイツの良いところだ。

相手を見て話すことはあんまりないけど。

「前に聞いた時、話してたくないからって言ってたよな？やっぱり、

「なんでか教えてくれないの？」

「……………貴方には関係ない事だから……」

「関係なくてもいいから。」

「……………聞かなくていい事よ……」

俺は小さくため息をつく。

この反応、教えてくれそうにない。

「…私も、貴方に聞いていい……………？」

「えっ…あ、いいけど？」

俺がそう言つと、桐島は俺を見て問うた。

「貴方…私と話してて、楽しい？」

変な質問をされて、すぐに返事ができなかった。

楽しいも楽しくないもない。

ただ話しかけているだけ。

…実際、どうなんだろう。

楽しくない訳じゃないし、楽しい訳でもない。

だとすれば、答えは…

「普通？」

それしかない。

「…………そう…」

桐島は一言そう言うともた前を向く。
また、無言の時間が流れた。

桐島は、いつも何を考えているのか。

いつも一人でいて、つまらなくないのだろうか。

周りの友達同士を見て、羨ましいと思わないのか。

色々な疑問が浮かんでくる。

友達はいらないと言った。

話をしていたくなくとも言っていた。

なのに、俺と一緒にいるのはどうしてだろう。

初めて会った時に、『私に近寄るなって言いたいの？』と聞いた。

返事は『…………別に…………』だった。

なぜだろうか。

コイツの事だ、本当に話をしていたくないなら、あの時の返事は違う筈だ。

なのに、今もこうして一緒にいる。

なぜだろうか。

「桐島」

「…………なに？」

「俺と話してるの、楽しくない？」

「……………別に…………」

「じゃあ、楽しい？」

「……………楽しくない…………」

「どっちだよ」

俺がそう聞くと、桐島は少し考えた末、言った。

「…………別に…どっちでもない…貴方の言う、普通…」

という事は、俺と話をしているのは別に嫌ではないのだろうか。

「桐島」

考えるより先に、名前を呼んでいた。

「…………なに？」

桐島は、やはり前を見ながらそう返してくる。

「友達、なろうよ。」

「…え…………」

俺の言葉を聞いた桐島は、驚いた様子で俺を見た。
俺に迷いとかはなかった。

なぜか、俺が変えてやらないといけないと思った。

この一人の人間を。

この一人の女を。

「…意味が……………意味が…分からないわよ…………」

「俺と友達になろう、桐島。」

「あ、貴方……正気……？」

俺は、なにも言わずに頷いた。

「……でも……私……友達……なんて……必要ない……」

桐島は目線をアスファルトに移し、そう言う。

どう言ったら、頷いてくれるだろうか。

ほんの少し考えてから俺は聞き返す。

「じゃあ、俺には桐島が必要なんだって言ったら、友達になれるのか？」

「えっ……」

「なってくれる？」

「……」

桐島はなにも言わず、アスファルトを見ていた。考えているらしい。

俺は、なにも言わずに返事を待った。待つしかなかった。

「……私が必要なのは……どうして？」

不意に、桐島はそう聞いてきた。俺を見て。

その目は、本当に疑問だと言っていた。

俺は迷わず答えを返す。

「桐島が好きだから、一緒にいたい。」

「……………」

桐島が啞然としているのを見て、ハツとした。
今の言い方は、まずかっただろうか。

いや、流石にまずかっただろう。

「あ、い、今のは別に、告白じゃないからな？ 今のは、その…言葉のあや、と言うか…なんというか…その…」

俺が焦って弁解すると、小さく、桐島が笑った。

一瞬、言葉を失った。

コイツ、笑うとこんなに可愛いんだな…不意にそう考えてから、我に返る。

「わ…笑うなよ…」

俺は苦笑し、そう言った。

桐島は『だって…』と言って、またクスクスと笑う。
俺も、つられて笑みがこぼれた。

…これからも、こんな風に笑ってくれるだろうか。

こんな風に、笑顔を見せてくれるだろうか。

この時、俺はなぜかそう思った。

そんな時、丁度、東多美丘駅に着いた。

「あ……………」

「着いた。」

「…うん。」

「じゃあまた明日、学校で。」

「…図書室で……の間違いよ…」

桐島は俺の言葉に訂正を入れる。

「あ、そうだな。じゃあ、図書室で。」

「…うん………」

そう言った桐島は、少しだけ微笑んでいた。

桐島は『じゃあね…』と言って、ここからも見える大きなスーパーへ向かって歩いていく。

今日、桐島との距離が少しだけ縮まったように思う。

不思議とそれが嬉しかった。

俺は桐島を見送った後、駅の中へと歩いていった。

- 優花の家 -

「ただいま…」

買い物から帰ってきた私は、玄関のドアを開けて家の中に入った。
買ってきたものを母に渡すと、私は階段を上って、二階の部屋に向かう。

部屋の電気をつけ、ベッドに座って一息つく。

「……………友達…か…」

私は、数分前に話した事を思い返す。

『友達、なろうよ』

まさかあんな事を言われるとは思わなかった。
実際、私に友達は必要ない。

でもあの人は…転校生は私が必要だと言った。
好きだから、と。

あの言葉は告白の意味がある訳ではない。
私もそこまで馬鹿ではないから、それくらいは分かる。
正直、聞いたときは、嬉しさを感じる前に迷った。

友達を求めてしまったら、次は何かまた別のモノを求めてしまうの
ではないか、と。

こんな私が、何かを求めているのだろうか。
今まで何もかも諦めていて、なにも望まないでいた私が。
友達を作ってもいいのだろうか。

自分でも、自分の事なのに、自分がどうしたいのか、よく分からな
かった。

それに、相手は音楽に携わる人間。

私が手術をして、この声を失ってしまった時、歌を歌えなくなっ

しまった時、あの人と普通に接することができるのだろうか。

…多分、無理だ。

きつと、辛すぎて私の心が折れてしまう。

きつと、応援したい気持ちと、羨ましいと思ってしまう気持ちが交わりあって、複雑な気持ちになってしまう。

「……………私は今…どうしたいのだろうか……………」

分からなかった。

今この状況で、私は何がしたいのか。

やりたい事は、何もない。

欲しいものも何もない、筈だったのに…

転校生の言葉が、私の心に突っかかっている。

やっぱりあの言葉が、気になっていた。

私は、こんなにも誰かを気にしたことはなかった。

これが恋愛感情なのかそうでないのかは、正直分からないけど、私の心は今、純粹に友達を欲しがっているのだろう。

それに、今日、転校生と話していて、分かった事がある。

やっぱり、話をしていると楽しいという事。

あの時、自然と笑みがこぼれた。

あまり笑えない私を、あの人は笑わせてくれた。

あの人なら、こんな私を変えてくれるかもしれない。

昔みたいに、私は…人前で笑える人間に、変わるかもしれない。

そんな人間に、戻れるかもしれない。

私はそう思った。

しばらく部屋で考えていると、部屋のドアが開き、花梨が顔を覗かせた。

しばらく部屋で考えていると、部屋のドアが開き、花梨が顔を覗か

せた。

「ご飯だよ？」

「あ、うん…すぐに行くから。」

「うん、分かった。」

花梨は笑顔でそう言うと、部屋のドアを閉め、階段を駆け下りていった。

私は部屋の電気を消し、一階に行った。

- 9月4日 多美丘高校 図書室 -

朝。いつも通りの時間に高校に来た私は、図書室にいた。
転校生はまだ来ていない。

別に、来なくてもいいけど…私はいつも通り外を見ることにした。

外を見てみると、ドアが開く音がした。
転校生だった。

「おはよう桐島」

「……おはよう……」

私がそう返すと、転校生は嬉しそうに笑った。

それから私の隣に立つと、外を眺める。

「……桐島、昨日の答え、聞かせてよ。」

昨日の、というのはおそらく、友達になってくれるかどうかだろう。思えば昨日、結局返事が決まらなかった。どうすればいいだろう。

素直に友達になった方がいいのだろうか。

「きーりーしーまー」

「え……」

私は転校生に呼ばれて我に返る。

「そういう反応、この前されたような……ていうか、そんな深刻そうな顔しないでよ……」

「……」

「なんか、困らせちゃった……?」

私はそう言われて、慌てて首を横に振る。

「……困ってないわ……ただ……迷っているだけ……」

「……何を考えて、迷ってるの?」

「……それは……」

「……やっぱり言えない？」

「…………言えない……」

本当は、言いたかった。

歌うのが好きだけど、喉の病気で、手術したら声が出なくなるかもしれない、だから、歌えなくなってしまった時、貴方と一緒にいるのが辛くなるかもしれないって。

だからこのまま、ただの顔見知りでいてほしいって。

でも、言おうとすると言葉がつまる。

昔からの……病気になるってからの癖。

家族以外に、病気の話ができない。

その他にも、本当の事を言えなくなってしまった。

本音を言えなくなってしまった。

私はなぜか申し訳なくなり、転校生を見て謝った。

転校生は首を横に振り、言葉が続ける。

「謝ることない。俺だって、言えないことあるし……仲間に秘密を作るなって言われてるけど、1つだけ秘密なことがある。人間って、言えない事、1つくらいは必ずあるから。」

そう言って、笑ってくれた。

今更だけど、この人は優しい人だと思う。

私が言わないと……いかにも隠し事をしていても、笑って話しかけてくれる。

大抵の人は、私の反応や返事に残念そうな顔をするのに。

「……………」

もう、耐えられなかった。

一人で過ごしている事。

この人と話を…言葉を交わした時から。

私は、誰かと一緒にいる楽しさを思い出したようだ。家族と一緒に過ごしている時とは違う、楽しさ。

家族以外の人と過ごす楽しさを。

私は“彼”に向き直り、頭を下げた。

今言いたい事を、素直な気持ちを言おうと思った。

「……これから…よろしくお願いします…」

そう言った私の肩に、彼は手を乗せた。

顔をあげて、と言うように。

私は頭を上げるが、見ているのは図書室の床だった。

「…桐島。」

名前を呼ばれたので顔を上げ、彼の顔を見た。

「……また放課後、図書室で話しよう。そろそろ戻った方がいいから。」

彼は微笑みながら、図書室の時計を見てそう言う。

丁度、朝のホームルーム開始10分前だったので、私は小さく頷いた。

教室に着いた時、丁度ホームルーム開始5分前だった。
先生が来ていなくても、5分前には教室にいるようにと担任の西原先生に言われている。

騒がしい生徒達も、5分前に教室に戻ってくる。
そういうところは、しっかりしている。

私は席につき、5分間、本を読む事にした。

ホームルーム終了後。

私は、本を読んでいた。

生徒達は、彼…泉君の教室に行っているようだ。

私はいつも通り、一人だった。

いつもはこの一人の時間を退屈だとは思わないのだが、今日は不思議と退屈に思えた。

「友達がいる楽しさを、知ってしまったからだろう…」

私はそう呟くと、窓の外に見える空を眺めた。

今日の空も、綺麗な秋空だった。

- 放課後 2年B組 -

「じゃあね、泉くん！」

女子が手を振り、俺にそう言うので、俺は返事を返し、手を振り返

す。

それを何回か繰り返しているうちに、クラスのみんなは部活に行つて、俺だけが教室にいる。

いつもこんな調子だ。

朝から今まで、話しかけられるし色々聞かれる。

だから結構忙しい。

放課後は、やっと一息つける時間。

「もう少し時間が経てば、落ち着くと思うけど…」

俺はため息をつき、窓際に立つ。

今日も空は綺麗だった。

2週間後…

- 9月18日 放課後 多美丘高校 図書室 -

図書室のドアを開け、中に入った。

今日は珍しく、桐島が本を読んでいた。

「それ、なんの本？」

そう聞くと、桐島は俺の方を見て、『空……』と、いつもの調子で一言答える。

「空？」

俺が聞き返すと、桐島は小さく頷く。

「……空の写真が載っていたから……見てた……」

「へえ……桐島、空、好き？」

「……好きか嫌いで言ったら、好き……」

「そうなんだ。ま、俺も嫌いじゃないけどな。」

「……そう……」

桐島はそう言っつて、途中までしか見ていないにもかかわらず、本を本棚にしまう。

「あれ……全部読まないの？」

「……読んでいてほしいなら、読んでいるけど……」

「えっ……あ、桐島が読みたいなら読んでていいけど……」

「……じゃあ、読まない……」

桐島はそう言うといつものように外を見る。

今日は窓が開いていて、桐島のストレートで綺麗な髪が風で揺れる。こうして見ると、やっぱり外見は普通に可愛いと思う。

「なあ、桐島……」

「……なに……？」

桐島の悪いところは、やっぱりこの態度だ。
俺を見ないで外ばかり見て返事を返す。

「あのさ……たまにはこっち見て話——」

俺がそこまで言った時、桐島は口に手をあてて、苦しそうに咳き込んだ。

「桐島……？大丈夫？」

「けほっけほっ……、大丈夫だから……気にしないで……」

「風邪？」

「……多分……」

「じゃあ早く帰った方がいいんじゃない？」

「……そうね……」

辛そうな桐島を見ると、急に心配になった。

「送るよ。」

俺がそう言つと、桐島は首を横に振る。

「大丈夫よ……」

そう言つて、桐島はまた咳き込む。
やっぱり送ることにした。

「じゃあ桐島、帰るよ。」

俺はそう言つて歩き出すが、桐島は納得のいかないような表情をしていた。

歩くのを止め、再び名前を呼ぶと、桐島は渋々と返事をして、歩き出す俺の後ろを歩き出した。

- 校門前 -

私と泉君が校門を出て帰ろうとした時…

「いーずーみい…」

そんな頂垂れた声が聞こえたので振り返った。

そこには、前髪を上げている少し柄の悪そうな男の人と、それとは正反対で、髪を肩辺りまで伸ばしていて、大人しそうな男の人がいた。

後ろには、バイク一台とヘルメットが2つ。

「あ、晋ちゃん。どうしたの？」

雰囲気的に、泉君の知り合いのようだ。

「どうしたって…聞いてくれよ泉い…。とうとう俺、まっぴらに魔の泉を狩ってくるように言われたんだ…連れてこないと、菓子買ってくれないって言うんだぞ…」

晋ちゃんと呼ばれている男の人は、そう言って頂垂れる。

「それは災難だね晋ちゃん。でも、今日も行けそうにないんだ。」

「泉い…俺に菓子を食わせないって言うのか…？菓子食わないと練習できねえよ…」

「じゃあ明日、スナック菓子の詰め合わせと、駅前のロールケーキ買ってくるから。あ、ついでにたい焼きも。」

「…おし、それならいい。サボりを許す。ただ、今日だけだぞ？流石に、これ以上のサボりは許さないからなあ？」

泉君はそれを聞くと笑顔で『ありがと』と言った。

「んで泉い？その子なに？」

晋ちゃんと呼ばれている男の人は、私を指差す。

泉君は『友達だよ』と笑顔で言う。

「へえ？俺、ささもりしんざく笹森晋作っていうんだ、よろしくうつ。」

「……………桐島優花です……………よろしくお願いします……………」

喉が痛くてあまり大きな声が出せなかったが、笹森さんはちゃんと聞き取ってくれたようだった。

「優花かぁ。あと、こっちの喋らないのは、鷹野たかのすばる素晴つての。俺と鷹ちゃんは、泉のバンド仲間、なあ鷹ちゃんっ」

笹森さんは、鷹野さんの頭を笑顔でガシガシ撫でる。

鷹野さんは普通の表情から表情を変えず、ただ撫でられていた。

「じゃあ晋ちゃん、俺、桐島を家まで送るから。浅井にはサボってごめんって、謝っておいて。」

「はいよ、まつには俺から言っとくから安心しろつて。じゃあ鷹ちゃん、帰るぞ。ほいメット被れい」

笹森さんと鷹野さんはヘルメットを被ると、バイクに乗った。

笹森さんは前に、鷹野さんは後ろに乗る。

それから、バイクは大きな音と共に去っていった。

「…練習、さぼったてたのね……」

私が泉君にそう聞くと、彼は苦笑し、言葉を続ける。

「だってさ…ほら、練習頑張ってるし、たまには息抜きしなきゃってね…あはは…」

「…でも…今日はどうして行かないの…？私を送った後でも…時間、十分あるでしょ…？」

「ちょっと、ね。…それより、桐島は早く帰らないと。」

泉君はそう言って歩き出す。

私は黙って彼の後ろをついていった。

- 優花の家 -

桐島の家の前についた。

「今日は、早く寝なよ?」

「……うん……ありがとう……」

桐島は微笑し、そう言って家の中に入っていった。

この頃は笑顔になる事が増えてきていた。

俺は桐島を見送ると、帰り道を歩いていく。

今日練習に行かないのは、喉の調子が悪いからだった。

朝から喉が痛かった。

歌うのは、おそらく無理だ。

5日前の練習で喉を使いすぎたせいだろう。

5日前の痛みを、今日まで引きずっていた。

練習に力を入れている理由は、近々…3週間後に、ライブがあるからだった。

だから、歌いたい…。

でも、今歌ったら多分、この喉はしばらく使い物にならなくなるだろう。

だからメンバーには悪いけど、サボリという理由にして、今まで休んでいた。

「この喉…ホントふざけてるよな…」

自然に治るんだったら、治るまでは我慢してでも歌うのを止めるのに。

歌っていなくても治る訳じゃない。

それが、なにより俺を苛立たせる。

手術しなきゃ治らない…俺のように、手術しても完全に治らなくて、障害が残る可能性がある人間もいるのに、火傷や捻挫、腕の骨が折れたりヒビが入ったくらいでキヤーキヤー騒ぎ立てる患者を見ると、呆れてものも言えない。

そんな人間を見ると、不幸ぶるのもいい加減にしろ、と思う。言ったことはないけど、言ってやりたいと思った一言がある。

お前達が不幸なら、俺は数倍不幸だ、と。

でも、そんな同情を求めるような事は言わない。

それに、俺よりも不幸な人間はいくらでもいるから、俺はそんな事を言える立場にはいない。

だから弱音を吐く暇があるなら、俺は歌を歌おうと思う。

唯一、楽しいと思う、歌を歌うということを、手術するその時までしていたい。

俺の歌を好きでいてくれる人達に、俺は歌を贈りたい。

この喉が使い物になる、その時まで。

- 優花の部屋 -

今日のはきつと、ただの風邪だと思う。

朝から少し、頭痛もした。咳をすると喉が痛い。

病気のせいで痛むのと、風邪のせいで痛むのとが重なると、喋るのも嫌になってくるほどの痛みが走って止まない。

今日は早く寝たいので、私は今のうちにお風呂に入る事にした。

その夜。私は少しだけ夕飯を食べ、風邪薬を飲んで寝た。

- 9月19日 優花の部屋 -

「38度2分…、今日は休んだ方がいいわね。病院行こうか。」

私が小さく頷くと、母は下の階に行った。

熱があるので、私は今日、学校を休むことになった。

酷くだるく、何もやる気にならない。

重い体を起こし、私は私服に着替える。

- 病院 -

平日でも患者はいるので、病院は少し混んでいた。

しばらくの間、母と待合室で待っていると、看護師の女性が私の名前と、他数人の名前を呼んだ。

それから診察室に呼ばれ診てもらうと、『風邪ですね。熱に効くお

薬と、咳を抑える薬をお出しします。』そう言って少し笑って見せた。

それから薬を貰いに行き、家に帰った。

- 優花の家 優花の部屋 -

少しだけ朝食を胃に入れ、貰ってきた薬を飲み、ベッドで寝ていた私は、ただぼんやりと天井を見ていた。
何もする気が起きない。

でも、なんだか今日は物足りない感じがした。

「そっか……今日…泉君と話してないから……」

だから物足りないんだ。

この頃は、彼と話をしてから放課後までを過ごしているから。

「明日は……学校行けるかな……」

私はそう呟いて、目を瞑った。

睡魔によってだんだんと意識が遠退いていき、私は夢も見ないほどの、深い眠りについた――。

- 放課後 多美丘高校 2年A組 -

「えっ？今日、桐島休みなの？」

「うん、風邪だつて。熱もあるって先生言ってたよ。」

A組の美樹に桐島の事を訪ねた。
朝、図書室に来なかったから。
今日は休みだったらいい。

「そっか。ありがと。」

「泉くんは、これから練習？」

「いや、これから――」

桐島の様子を見てくる。

と言いかけて、言葉に詰まった。

昨日、明日は練習に行くと、晋ちゃんに言った。

だから、今日は練習に行かないといけない。

それに今は、優花に会いに行く事より、練習を優先しないといけない。
い。

「うん、これから練習。」

「そっか。頑張つてね！」

「うん、ありがと。」

俺はそれから、駅前のロールケーキとたい焼き、スナック菓子の詰

め合わせも忘れずに買って、バンドのメンバーが待っているスタジオに向かった。

…桐島の様子を見て来るだけなら、時間的には大丈夫だろうけど、多分、桐島に会ったら、練習に行きたくなくなるだろう。だから俺は、桐島のところには行かない事にした。

- スタジオ -

「あつ！見て長まつちゃん！泉くん泉くんっ！」
ドラム担当の、あんどうしゅうた安藤翔太が、スタジオに入った俺を指差し、そう言った。

「サボリ魔登場」

俺が笑顔でそう言ったのを見て、ベース担当の、あさいながまさ浅井長政は小さく安堵のため息をついた。

「今日はちゃんと来てくれたね、莉央くん。」

「うん。これからはちゃんと来るから。あと、晋ちゃんにはこれ。」

俺はそう言って、ギター担当の笹森晋作：晋ちゃんに買ってきたものを渡す。

「おっ、サンキュ、泉い！」

晋ちゃんは早速たい焼きを頬張る。

「作ちゃんは、相変わらずよく食べるねえ…」
翔はそう言って苦笑する。

すると晋ちゃんは『これが俺の取り柄だ!』と言った。
それを聞いた浅井は、『それが取り柄なの?』と言ってクスクス笑っている。

「……莉央…」

「ん?なに鷹ちゃん?」

キーボード担当の、鷹野素晴…鷹ちゃんは、俺の腕を引き、メンバーから離れる。

「鷹ちゃん?」

「5日間…サボっていたんじゃないくて…本当は…休んでいた…、
違う…?」

「えっ…」

「…具合…悪かったり…とか…」

「あ…あははっ。そんなわけないよ、いきなりなに言っかと思えば…
…大丈夫、健康そのものだから。」

「……そう…?」

「そっだよ。」

「……そう……」

鷹ちゃんがそう言った時、翔が笑顔で駆け寄ってきた。

「二人とも、なにこそこソやってんの？作ちゃん待ってたらきりないから、練習始めちゃおう？」

「うん。行こう、鷹ちゃん。」

俺がそう言つと、鷹ちゃんは頷いた。

鷹ちゃんは妙に勘が鋭いから、気づかれないように気を付けないと嘘をつくのは、やっぱり心苦しかった。

でも……知られたら、きつと……きつと、変な気を使わせてしまつたろう。

だから俺は、病気の事は隠している。

……本当は言いたいけど。

今まで通りの関係でいられなくなる気がして……言えない。

「泉くん……」

「——えっ……な、なに？」

翔に呼ばれて、我に返った。

「な、なに？じゃないよ……」

翔はそう言つて膨れていた。

「歌、入ってもらわないと続けられないよ？」

「え……あ……」

今は歌の…曲の練習の最中だった。

「ご、ごめんごめんっ…ぼーっとしてた…」

「しっかりしろよ泉い！」

晋ちゃんはそう言いながらスナック菓子をバリバリ食べている。

それを見た翔は、呆れたようにため息をついた。

そんな中、心配そうに俺を見て『具合悪い…？』と浅井が言ったので、慌てて首を横に振る。

「ちょっと考え事してただけだから。」

「そっか…じゃあもう一回、初めから。」

「うん。」

「じゃあいくよー！泉くん、次はしっかりね！」

「了解っ。」

翔がスティックをぶつけ合う音を合図に、演奏が始まる。

——そうだ。

考え事なんかしている暇はない。

今は、歌うことだけに集中しよう。

- 優花の家 優花の部屋 -

ふと、目が覚めた。

何度か寝直したけど、流石にもう寝直せない。

私は、まだ重くだるいからだを起こし、時計を見た。
18時を回っている。

「…もう…学校も終わって…練習してるのかな…」

今日1日、何度か考えた。

…彼、泉君の事。

どういう訳か、気になる。

話をしたいと思う。

どうしてだろう。

どうして、こんなに気になるんだろう。

いつもはこんなに気にならないのに。

いつもは、別に来なくていいけど、なんて思うのに。

どうして今日は…今日はこんなに会いたいと思うんだろう。

「……きつと…熱のせいよ……」

私は一人していると色々考えてしまいそうなので、とりあえず下の階に行くことにした。

「あら優花。具合は大丈夫？」

「うん…大丈夫…」

「そう、よかったわ。今日の夜、おかゆでも食べる？」

「うん…」

「じゃあ今から作っちゃうから。」

私はそれを聞くとソファーに座り、テレビをつけた。
丁度、天気予報がつき、明日の天気を予報していた。

…明日は、晴れの予報だ。

- 9月20日 多美丘高校 図書室 -

ドアを開けて、中に入った。

中には泉君の姿があった。

窓から外を見ていたようだが、私が来たのに気づくと私を見て『おはよう』と微笑しながら言った。

私は挨拶を返すと泉君の隣に行く。

泉君が空を見たので、私も空を見てみた。

今日は昨日の予報通り、晴れ。

「具合良くなった？」

「……喉が、少し痛いけど……大丈夫……」

「そっか。」

「……貴方もちゃんと……練習に行っただ……？」

「うん、行っただ。」

「……そう……」

そう言葉を交わした後、私と泉君は何も話さなかった。ただ一緒にいて、空を見ていた。

- 多美丘高校 2年A組 -

私が席につくと、美樹さんがこちらを振り向いた。

「おはよう優花ちゃん！」

いつもの笑顔だった。

「……おはよう……」

私もいつものように挨拶を返す。

「えっと……具合はもう大丈夫？」

「……うん……大丈夫……」

「そっか。よかった……熱あつたって聞いたから。」

「もう熱は引いたから……大丈夫……ありがとう……」

私がそうお礼を言うと、美樹さんは嬉しそうに笑ってくれた。

- 放課後 多美丘高校 2年A組 -

クラスの皆が教室を出て行き、私一人教室にいた。

泉君は今日も練習があるだろうから、今日は早く帰ろうと思って、席を立とうとした時

「桐島。」

後ろのドアから顔を覗かせて、泉君が私を呼んだ。

私は泉君の方を見る。

「どうかしたの……？」

私がそう訪ねると、泉君は教室の中に入って、後ろにある壁に寄りかかる。

「……今日、練習あるんでしょう……？」

「うん、あるよ。」

「……さぼる気…？」

そう問うと、泉君はクスクス笑って『違うよ』と言いながら、首を横に振る。

「近々ライブがあるから、今はサボれないんだよね。」

「……じゃあ早く行った方が…」

「うん、そうなんだけど。桐島の様子見にね。」

「なによ…それ…」

私がそう呟くと『なんとなくだよ。』と言って笑った。

「じゃあ俺、練習行つて来るから。」

「うん……頑張つてね…。」

「うん。また明日、図書室で。」

「…うん……また明日…」

それから泉君は教室を出て行き、帰っていった。それから少しだけ、私は空を見ていた。

- 帰り道 -

「……………なに言っただろ……………ていうか、なんで桐島に話しかけたんだ？俺……………」

時々、自分でもよくわからない行動をする。

さつきみたいに、ただ帰ろうと廊下を歩いていて、たまたま桐島を見つけた時とか……………今日みたいに急いでる時、クラスメイトは素通りするのに桐島を見るとなぜか話をしたくなったりして……………」

「……………この分だと、今日も遅刻だな……………」

俺は小さくため息をつく。

なんなんだろう、この頃……………やけに桐島が気になるというか……………話をしていたと思うというか……………一緒にいたい……………というか……………」

「あ……………もー訳分かんない……………」

今の俺は、明らかに変だ。

桐島と話をした時から、確かに気にはなってたけど、ここまでじゃなかった。

ていうか、こんな気持ちじゃなかった……………ただ、この女に生きてるのは楽しい事だつて……………桐島を変えてやりたいって思ったただけだった……………でも、今は違う。

今の気持ちは、単純に一緒にいたいってだけで……………会いたいって……………思うだけで……………“あの女”の時と……………似ている……………。
もしかしたら、俺は……………」

「…まさかね…あり得ないって…」
小さく息を吐く。

思わず苦笑いした。

今は桐島の事より、バンドの事を考えないといけないのに。
俺の頭に浮かぶのは、桐島の事ばかりだった。

- 10月11日 ファミレス -

あつという間に3週間が経ち、ライブの後、俺はメンバーとファミレスで軽く食事をしていた。
そんな時…

「そうだ！ねえ泉くん！明日みんなで出かけようよ！」

翔が俺を見てそんな提案をした。

「お、いーじゃんいーじゃん！なあ、行こうぜ泉い？」

晋ちゃんも俺を見てそう言った。

なぜか俺は、バンドのリーダーって事になっている。

「んー…そうだな…浅井はどう思う？」

「いいんじゃない？たまには息抜きしなきゃね。」

「じゃあ鷹ちゃんは？」

「……………いいよ…別に…」

「やった！じゃあ泉くん、場所どこにする？あつ、俺、海行きたい！」

「バカか翔ちゃんは！海なんて、さみいだろが！」

「いいの！俺は海がいいの！入る訳じゃないし！作ちゃんは10月に海に入るんですかー？」

「入るかよ！……仕方ないな…そんな事を言う腐った脳ミソをもった翔ちゃんには…グリグリ攻撃のお仕置きだぁ！！」

晋ちゃんはそう言っつて、翔の左右のこめかみを左手と右手の拳でグリグリ押す。

「あててててっ！ごめんね作ちゃん！今のは勢いだよぉ！おふざけだよぉ！」

翔は痛がりながらも笑顔だった。

一方の晋ちゃんも笑顔だ。

「俺におふざけは通用しねーってえの！」

「二人とも…あんまり騒いじゃ駄目だよ。」

浅井が苦笑してそう言っつと、二人は苦笑しながら浅井に謝った。俺もつられて笑いながらどこに行くか考える。

「じゃあ…みんなの行きたいところ、全部行けばいいんじゃない？」

これが一番、手っ取り早い方法だった。
すると、

「あそつかあ。じゃあ俺は海い！」

と、翔。

「俺はバイクの部品調達してえ！」

晋ちゃん。

「俺はどこでもいいよ。」

浅井。

「……どこでもいい……」

鷹ちゃんが、各自答えた。

「じゃあ、ぶらぶら歩きつつ、バイクの部品調達して海に行く。海は最後になるかな。」

俺がそう言つと、みんなは頷いた。

集合場所と集合時間を話し合った結果…明日は、10時頃に、多美丘駅集合という事になった。

- 10月12日 多美丘駅 -

10時過ぎ。俺は多美丘駅にいた。
浅井と俺の二人しか、まだ来ていない。

「そろそろ来てもいい頃なのにね…」

浅井が辺りを見渡してそう言った。

俺は『そうだな。』と一言返し、浅井同様、辺りを見渡して他のメンバーを待った。

少しして電車が駅に止まった。

改札口からは次々と人が出てくる。

その中に、翔の姿があった。

翔は俺と浅井に気付くと、駆け足でこっちに来た。

「ごめん、遅くなっちゃった…」

苦笑しながらそう言う翔に、浅井は『大丈夫だよ』と笑顔で言っていた。

問題は残る二人、晋ちゃんと鷹ちゃんだ。

あの二人は、こういう時には決まって遅刻する。

鷹ちゃんは、晋ちゃんとバイクに乗って色々な場所を行き来する。遅刻するのは、道路が混んでいるとか、そういうわけではなく、ただ晋ちゃんが寝坊するからだ。

「泉くん、作ちゃん、また寝坊かなあ？」

「うん、多分。まあ、気長に待とう。」

「うん、そうだね。」

- 優花の家 優花の部屋 -

午後0時。特になにもすることがないので、とりあえず宿題を終わらせた。

今日は花梨もいないし母もいない。

家には、私一人だった。

でも、ぼんやりしていると泉君の事を考えてしまう。

やっぱり、泉君に会いたいと思ってしまふのは、熱のせいではなかった。

どうしてこんなに、気になるんだろう…考え込んでしまふときりがないので、とりあえず私はテレビを見ていた。

ニュースがやっていたので見ていたら天気予報が始まった。

天気予報では、今日は晴れ。

降水確率は低く、雨の心配はなさそうだ。

「…出かけようかな……」

どうせ家にいても、なにもする事がない。
それだったら、散歩でもして気分転換もいいと思う。

「…………散歩…してこよう…」

私はそう決めると軽く食事をとり、服を着替え、外に出た。

何時間か目的地もなく歩いていたら私は、行きたい場所が1つ思い付いたので、電車に乗って目的地に行った。

- 海 -

16時頃。海に着き、波が凄い音を立ててテトラポットにぶつかり、飛沫をあげるのを見ていた。
海のおいを、久しぶりに嗅いだような気がする。

「…………少し…風が冷たい…」

私はそう呟いた後、なぜか私は歌を歌った。
この喉さえ正常だったなら、私は今、友達とカラオケに行っていたかもしれない。

もっと笑える人間になっていたかもしれない。
もっと、友達がいたかもしれないのに…この喉が…病気という存在

が、私を今の私へと成長させた。

私が望んでいたわけではない、この姿、この性格に。

病気を知らなかった小学校時代の私。

友達もたくさんいたし、たくさん笑えていた、当時の私。

今の私とは、比べ物にならないくらい、可愛かったと思う。

笑顔で走り回る、元気な私：運動だって、人並みにはできていたのに…今は、一変してしまった。

外に出るのは、ほとんど買い物をする時や学校に行く時だけ。

遊ぶ友達もいなくて、運動すると咳が止まらなくなるから運動すらできない。

こんな、寂しい…悲しい…哀れな人間になった、今の私。

小さい頃は、人生はずっと幸せなんだと思っていた。

みんなが幸せで、平等で、平和で…不幸なんか存在しないんじゃないか、なんて考えていた時もあったのに…今じゃ、この有り様。

みんなが幸せなんてあり得ない、平等なんかじゃなくて、不幸のきっかけなんか、そこら辺にたくさんある。

そのきっかけを通して、借金を作ったり、浮気をしたり、盗みをしたりして、幸せを感じたかと思うと、すぐに不幸が訪れる。

そんな考えしかできなくなった、私。

骨を折ったり、捻挫をしただけで騒ぎ立てる周りの人間を、私は心から軽蔑した。

そんな人間を嫌い、ふざけるなと何度も思った。

ちゃんと治るのに、少し我慢すれば治るくせに、大袈裟に騒がないで。

この言葉を何回心の中で呟いただろう。

ちゃんと安静にしていれば、病気が跡形もなく治ってしまう病気の人や、健康な人を見ると、羨ましくてならなかった。

泉君を見ている、そう。

大好きな歌を歌えて、きつと今を楽しんで生きているんだろう。

病気なんか知らなくて、健康で、仲間と楽しそうに笑って…そうや

って今も過ごしているんだろう。

私の友達には、不釣り合いな、優しい人。

いつも会いたいと思う、私の友達。

一緒にいたいと思うけど、私にかまわないで、他の子をかまっ
てあげてほしいと思う事もある。

私が独り占めするには、贅沢過ぎる人だから。

「……………」

だから、この気持ちに恋愛感情じゃなければいいと思う。

- 同時刻 海 -

16時頃。最後に来る予定だった、海に着いた。

「おー、海だあ！」

翔が目キラキラさせながら海を見ると反対に、『さみい…』と

少し震えながら言う晋ちゃん。

その時、海の方から歌が聞こえた。

綺麗で透き通った、女声。

それより気になる事がある。

この声の主、歌うのがやけに上手い。

「ん？泉くん、これ、歌？」

「そうみたい。」

「うーん、誰だろうね？この声は女の子かなあ…ていうか上手い…」

「行ってみりゃあいじんじゃね？その方が早いつて。」

晋ちゃんがそう提案したので、みんなで歌が聞こえてくる方に向かった。

声の主は、意外にも俺の知っている人物…桐島だった。

「桐島…こんな、歌上手かったんだな…」

「きりしま？泉くん、知り合い？」

「優花は、泉の高校の生徒でな、泉の友達だ。」

「へえ…この声、泉くんと合いそうだね！」

翔がそう言つと、浅井も『うん、確かに』と笑顔で言った。

「いつその事、バンド仲間にしちまうか！」

「し、晋ちゃん、なに言つて…」

いくらなんでも、桐島がメンバーになってくれるとはどうしても思えない…。

「そうだね！歌も上手いし、ビジュアル的にも、大丈夫な顔だよ！

まあ、女の子だけ…」

翔の言葉に思わず驚いた俺に、浅井が問いかけてきた。

「莉央くんはどう思う？」

この浅井の反応はもしかして…

「まさか…浅井も賛成派か！？」

「あはは、まあ、反対はしないよ。歌上手いし、ビジュアル的にも特に問題ないし。まあ、女の子だけ。」

予想的中だった。

「…浅井まで…鷹ちゃんは…？」

「……意義無し……」

こうもみんなに認められるとは意外だ…でも、それもいいかもしれない。

桐島の男だけど、友達も増えるし、1日に話す回数も増える。

つまらなそうにしている桐島を変える、いい機会かもしれない。

そう考えていると、歌が終わったようだ。

「おい、優花〜！」

気付けば、晋ちゃんが桐島の名前を呼んでいた。

桐島はこっちを振り返ると驚いていた様子だった。

「おい、優花〜！」

後ろから聞いた事のある声がして、振り返った。

そこにいた人を見て驚いた。

そこには、泉君と笹森さん、鷹野さんがいた。

その他の二人も、おそらくバンドのメンバーだろう。

まさか…聞かれてた…？

私がそう思った束の間、泉君たちが私の所に来た。

「…どうして…ここに…？」

私が泉君にそう問うと、『みんなで行きたい場所を歩いてたんだ』と、微笑して答えた。

「桐島こそ、なんでここに？」

「……ただ…気分転換のために、散歩してただけ…」

私がそう言つと、笹森さんがとんでもない事を言い出した。

「なあ優花、俺らと一緒に歌、歌おうぜ？優花、歌うの上手いし、泉の声と合いそうだし！」

私は言葉に詰まり、泉君を見る。

泉君は苦笑している。

「ごめん…うちのメンバー、言い出したら止まらないんだ。諦め悪いっていつか…やっぱり無理？」

「……………」

「桐島さん！お願い！泉くんのためだと思って！」

名前は知らないけど、泉君のバンドメンバーの人で、どこか子供っぽさが残っている人が、私にそう言って顔の前で手の平を合わせる。

「…………でも…………私…………」

どう返事をしていいか迷っている私に、もう一人、名前は知らないけど、泉君のバンドメンバーの人が声をかけてきた。

「じゃあ一回だけ、やってみない？」

「…一回、だけ…？」

「例えば、2ヶ月先にある、ライブハウスで行うライブに、特別メンバーとして参加する、とかね。」

「おお、それいいじゃんっ！ナイスだ、まつ！」

笹森さんに、まつと呼ばれたその人は、『ありがとう』と笹森さんに笑顔で言っていた。

「答えはいつでもいいし、嫌なら嫌だって、断っても大丈夫だよ。ね、莉央くん？」

「うん。どうせ同じ高校だからいつでも聞けるし、学校で会った時にまた聞くから、それまで考えてて、桐島。」

泉君に笑顔でそう言われた私は、とりあえず、うなずく事しかできなかった。

- 優花の家 優花の部屋 -

家に帰ってきた私。

歌を聞かれてしまった…よりによって泉君とそのメンバーに。歌手の人に…聞かれてしまった……

「……………どうしよう…」

一緒に歌わないかと言われて、嬉しいけど、喉の事が頭に浮かんで素直にうなずけなかった。

「喉さえ……正常だったら…」

でも、少し興味はある。やってみたいと思う。正直に、やりたいと言っべきだろうか…

「……………」

私はしばらく、その事で頭が一杯だった。

朝…私はいつものように図書室の窓から空を見ていた。
泉君はまだ来ていない。

今日の私は泉君が来るのを待っていた。

ドアの開く音がしたので、私はドアの方を見た。
泉君だった。

いつも通り挨拶をされ、いつも通り挨拶を返す。

泉君は私の隣に立つと、空を見る。

「あ、そうだ。桐島、答え決まった？」

「……………うん……………」

「そっか。…それで、俺と一緒に歌ってくれる？」

「……………一回だけなら……………」

「浅井が言ってた、2ヶ月先にあるライブで、って事？」

「うん……………」

「分かった。じゃあ、今日から練習一緒にいこう。」

「…………あの…泉君…………」

「なに？」

「あの…………私…その……………。」

私はそこまで言うと、うつむいた。
やっぱり、言葉に詰まる。

なぜ言えないんだろう、病気の事…喉の病気があるから、迷惑かけるかもしれないって…言おうって…決めたのに…

「…………いいよ、無理して言わなくて。」

「えっ…」

「言葉に詰まる程の事、無理して言わなくていいから。」

泉君は微笑してそう言ってくれた。

「…………でも…」

これは知ってもらった方がいい事だろう…
これから迷惑かけるかもしれない、この人には…

「いつでもいいから。言える時に言ってよ。今、俺に言いたかった事。」

それを聞いた私は、うなずいてしまった。

優しい言葉に甘えてしまう私は、臆病者そのものだ…。

俺は一人、図書室にいた。

珍しく桐島はまだ来ていなかった。

いつもは俺が行くと窓から空を見ているのに。

——ポツポツ…ザアアアア…

そんな音が聞こえたので、俺は窓から外を見た。

「…あ…雨…」

雨が降ってきた。
結構強い。

「……天気予報、外れたな…」

そう呟いた時、ドアが開いた。
見ると、そこには桐島がいた。

「……雨…降ってきたね…」

桐島はそう言うと、俺の隣に立ち、外を見る。

「そうだな…俺、傘持ってきてないんだよね…」

「……折り畳み…貸す…？」

「え…?」

桐島は鞆から赤と紺の折り畳み傘を2つ取り出し、紺色の折り畳み傘を俺に差し出す。

「…泉君…持つてこないだろうと思って…持つてきた…」

「そっか…ありがと桐島。」

俺はそう言つと、折り畳み傘を受け取る。

「それじゃあ行くか。」

「…うん………」

- 帰り道 -

傘をさしながら桐島と二人で歩いていた。でも、無言で歩いているのもつまらない。

「桐島は、雨の日好き?」

俺はなんとなくそんな事を聞いた。別に、と言われるかと思ったのに、『嫌いじゃない…』と普通に答えてくれた。

「…泉君は…雨の日、好き……？」

そう聞き返されて少し驚いた。

「俺は……微妙だけど、普通かな。」

そう答えると、桐島は『……そう……』と言って、また喋らなくなる。
また無言になりそうだから、俺はまた質問した。

「んー…じゃあ桐島は、どんな天気が一番好き？」

「……晴れ……」

「へえ…まあ、俺も晴れが好きかな。」

「……じゃあ…季節は……？」

「季節？季節は…夏か秋。桐島は？」

「…私も…夏か秋……」

そんな会話をしながらスタジオに向かっていた。

- スタジオ -

俺と桐島がスタジオに入ると、いち早く翔が反応した。

「あつ、泉くん！」

「お、優花も一緒って事はOKもらったのか泉い！」

晋ちゃんが笑顔でそう聞いてきたので、俺はうなづく。

「浅井が言ってた、一回だけって条件付きだけど。」

「いいんじゃない？それでも。歓迎するよ。」

浅井も笑顔でそう言った。

「あ、練習の前に、浅井と翔の紹介しないと。」

俺がそう言つと桐島は小さくうなづく。

すると、椅子に座っていた翔が立ち上がった。

「はいはい！俺、安藤翔太！ドラムやってる！ヨロシクね優花ちゃん！」

「俺はベースの浅井長政。よろしくね。」

優花はそれを聞くと小さく『よろしくお願いします…』と呟く。

「じゃあ早速、練習始めるか。」

俺の一声で、一同はうなずき立ち上がった。

- 10月21日 優花の家 -

泉君たちと練習を始めて、1週間が経とうとしていた。

当然、私の喉は慣れない事を毎日長時間しているから痛みがいつもより少し強い。

それでも、精神的には辛いと感じる事はなく、逆に楽しいなと思いながら練習を続けていた。

それに、泉君に病気の事も話していない。

正直、迷惑をかけてしまいかも知れないので、言った方がいいとは思っても思っている。

でも、やっぱり私は言えなかった。

普通に接してくれない光景を想像しただけで、言いたくないと思うてしまう。

「……練習…行かないと…」

そろそろ練習時間になるので、私はいつもの練習場所、スタジオに向かった。

- スタジオ 個室 -

スタジオに着くと、私と泉君は、他のメンバーとは別の部屋で練習

を始めた。

私は歌に関しては全くの素人なので、昨日までは、歌うのに必要な基礎知識を教えてもらっていた。

「よし、練習始めるか。」

「……うん……」

「基礎も粗方教えたし、今日から歌の練習するから。」

「うん…分かった……」

「ええと…まずは、楽譜渡さないかね。」

泉君はそう言って私に楽譜を差し出した。
私はその楽譜をもらい、一通り目を通す。

「まずは、AからBまで一緒に歌ってみよう。」

「うん…」

こうして、私と泉君の練習は今日も始まった。

何回かの休憩を挟み、今日は、練習終了時間10分前に練習が終わった。

泉君と私はまだ個室にいて、椅子に座って休憩していた。

「なあ、桐島」

「……なに？」

「どうして、一緒にやろうって思ったの？」

「え……」

「ライブの事。」

「あ………楽しそうだなって……思ったから……」

「へえ………なんか意外。」

「どうして……？」

「んー、雰囲気的に？」

「………そうね……」

「あれ、否定はしないんだ？」

「………別に……」

「あはは、そっか。」

「貴方は………どうして歌手になったの………？」

「………知りたい？」

「………別に………知らなくてもいい……」

「じゃあ知りたくない？」

「……………知りたい…」

私がそう答えると、泉君はクスクスと笑った。

「俺、小さい頃から歌うのが好きだったんだ。昔、俺の歌を聴いて、笑顔になってくれた人がいた。こんな、なんの取り柄もない自分でも、歌で誰かを笑顔に出来るのになって思ってた。いつしか俺の夢は、歌手になる事になってた。俺の歌を好きになってくれた皆を…これから好きになってくれる皆を絶対笑顔にする…これが、俺の目標。」

「…そう…すごい目標ね……………」

「そう？」

「…うん……………」

それから沈黙が続いた。

しばらくして口を開いたのは、やっぱり泉君だった。

「桐島は夢とかないの？」

「夢…？」

「将来、何になりたい？」

私は少し考えてみた。
将来、何になりたいのか。

だけど、なにも思い付かなかった。

「……分からない……」

「じゃあ、一緒に歌手になる？」

泉君は笑顔で軽くそう言った。

でも、私には軽い言葉に聞こえなかった。

もしかしたら、少し懂れているのかもしれない。
歌手というものに。

でも不思議と、なるうとは思わなかった。

「……桐島？」

「え……」

「ごめん、変なこと言った？」

「……ううん……。それより、時間……」

「あ……本当だ。じゃあ、出ようか。」

私はうなずいて、歩いていく泉君の後を追った。

2ヶ月後……

- 12月10日 スタジオ -

ライブ前日の昼頃。

今日もメンバーみんなで合同練習をしていた。

桐島も、メンバーのみんなと少し仲良くなったようだった。

「――ふう…よし、この辺りでちょっと休憩しよう。」

曲が終わり、俺はそう声をかけた。
すると…

「ういゝ…。つつかれたゝ…」

晋ちゃんは座り込み、

「足が…足がつりそうだよ…」

翔はスティックを置くと両脚をマッサージし始めた。

「んー…練習に力入れすぎた？」

俺は浅井にそう聞いたが、浅井は笑顔で『さあ？』と言っただけだった。

一番心配なのは、桐島だった。

多分、メンバーのみんなは気づいていないだろうけど、さっきから辛そうだから。

「桐島、大丈夫？」

「……、うん……」

桐島はそう言っつてうなずいた。
やっぱり様子が変だ。

「……そつか。今日頑張りすぎて、翔とか晋ちゃんが本番で潰れたら困るし、今日はもう終わりにしようか。」

「泉くんそれ本当！？やっつたー！」

「おし！鷹ちゃん帰るぞー！」

「うん……」

みんな、それぞれ片付けを始めた。

しばらくして、俺と桐島以外、部屋からいなくなった。
桐島は、部屋の中にあつたパイプ椅子に座つたままで、やっぱり辛そうだった。

「桐島……具合でも悪い……？」

俺がそう聞くと桐島は首を振る。

「……嘘ついてるんじゃない？」

桐島はまた首を横に振る。

この時点で不思議に思った。
さつきから、一言も喋らない。

「桐島……もしかして…喉痛いんじゃない？」

「……………」

桐島が、なんの反応もしない…という事は、肯定と捉えていいという事だ。

「どうして…なにも言わなかったの？」

「……………」
「ごめん…なさい……」

「…明日、ライブ出来そう？」

「…大丈夫……………」

「そっか。無理はするなよ？」

俺がそう言つと、桐島はうなずいた。

- 12月11日 ライブハウス ステージ上 -

今、6曲目が終わった。
大きく、沸き上がる歓声。

やっぱり歓声が嬉しかった。

みんな笑顔で俺の歌を聴いてくれて…凄く嬉しかった。

「——みんな、ここまで聴いてくれてありがとう！残念だけど、次が最後の曲。そして今日は、スペシャルゲストを連れてきた。今日だけ俺達と一緒に歌ってくれる…R o s aの歌姫、Y U K Aだ！」
ユウカ

俺がそこまで言うと、桐島がマイクを持ち、ステージ裏からステージ上に出てきて、俺の隣に並んで立った。

頭には小さなティアラをつけ、短いドレスを着ている。

その姿は、俺達メンバーも初めて見た。

——凄く可愛いと思った。

そんな桐島を見ると、観客達はまた歓声を上げる。

彼女自身は少し緊張しているようだ。

「これから歌うのは新曲。でも、ここだけでしか…今日しか聞くことが出来ない、スペシャルバージョンをみんなに贈るよ。聞いてくれ…I Z U M IとY U K Aで歌う、“I M I T A T I O M S T O R Y”！」

——キャアアアアア！！

歓声が大きくなる。

それと同時に曲の前奏が始まった。

ふと、桐島を見た。

俺が見てるのに気付いたのか、桐島もこちらを見た。少し緊張している面持ちだ。

そんな表情でも、いつもの仏頂面より可愛いく見える。

「いつも通りにやればいい。」

俺が笑って小声で言うと、桐島は少し微笑み、うなずいた。
そして、俺と桐島の歌が始まった。

曲が終わり、俺達は控え室に移動した。

着替えがあるので、桐島と俺達は別々の部屋を用意してもらった。
た。

明らかに桐島の方が着替えに時間がかかりそうなので、桐島には着替え終わってから、俺達の部屋に来てと言って、一旦別れた。

「あー…やっぱ普段着が一番落ち着くわ…」

「作ちゃん、ステージ衣装の時の方がカッコイイよ？」

「見た目の問題じゃないってのっ。それよりも、優花遅くねえ？」

「あ、確かにそうだね…」

「俺、様子見てくるよ。浅井は3人連れて、先に行つてて。」

「うん、了解。」

俺は桐島のいる部屋に行つてみる事にした。

——何故か、嫌な予感しかなかった。

桐島のいる部屋のドアをノックして、呼びかけてきた。
でも聞こえてきたのは、苦しそうに咳き込む声だった。

部屋の中に入ると、普段着の桐島が床にうずくまるように座って、苦しそうに咳き込んでいる姿があった。

俺は桐島の傍に行つて床に膝をついて座つて、その背中を撫でた。

「桐島、大丈夫か…!？」

「けほ、けほッ……泉…君……私の……バッグから…けほっけほっ……バッグから…薬……」

桐島は机の上にあるバッグを指差してそう言った。

「薬…?」

俺は立ち上がり、桐島のバッグの中を見た。

よく病院で貰ってくる薬が入っている袋が見えたので、それを取り出した。

そして、中に入っている薬を見て、驚いた。

——俺は、この薬を知っている。

現に今、俺はこの薬を服用している。

でも、どうして桐島がこの薬を…?

「けほけほっ…けほっ…」

桐島が咳き込む声にはつと我に返り、薬を1錠取り出して、桐島の飲みかけの水が入ったペットボトルと共に桐島に渡した。

桐島はそれを受け取つて薬を飲んだ。

それからしばらくは床に座り込んで咳き込んでいたが、だんだん薬

が効いてきたらしく、咳が止まった。

「……泉君…私が…言葉につまって…貴方に言えなかった時の事…覚えてる……？」

「俺が、改めて一緒に歌ってくれるかって、桐島に聞いた日だよな？」

桐島は小さくうなずく。

「あの時言いたかった事……今…言ってもいい…？」

「…うん。」

「……私…病気で…喉に腫瘍が出来てるの…丁度、中学生になる時…私は病院に行って検査をして…喉に腫瘍がある事を知った…。手術はまだ出来ないからって薬を出されて…激しい運動もするなと言われた…。もちろん、学校の体育も出来なかった…。そして、その頃から周りの態度が激変した…みんなが私に優しくしてくれるようになった…。でも、全然嬉しくなかった…病人扱いされてるんだって…分かってたから…。みんなは…私を、私として見てくれなくなつて…私を、ただの病人としか見なくなった…。仲が良かった友達でさえも…私を病人として見た…。裏切られた気持ちだった…。その時から、私は…友達を必要としないで生きていこうと思った…裏切られるのが嫌だったから…怖かったから…病気の事は誰にも話さないで、これからは一人で過ごそうって…。私…病気になる前は…普通の学生だったのよ…？病気にならなければ…私も…普通の人みたい…に…明るくて…ちゃんと…笑えてたのに…なのに……」

「桐島……」

かける言葉が、見つからなかった。

「貴方と友達になるかで迷った理由は……私も歌うのが好きだから……手術して声が出なくなったら……貴方が楽しそうに歌ってるのを、私は、心から応援してあげれなくなる……心のどこかで貴方を憎く思ってしまうかもしれない……羨ましくて、見ていられないかもしれない……私……貴方を見てるのが……辛くなりそうで……だから……迷ったの……」

どうしてだろう……こんな弱い女に……本当は何か言ってやりたいのに……かける言葉が見つからない……

「私……悔しい……どうして病気になってしまったのかって……どうして……薬を飲んでも治らないのかって……いつも……いつも思うの……治るなら……強い薬だって……大人しく飲むのに……だけど……治らない……。私……もう……こんな状態で過ごすのは……嫌よ……」

桐島は泣きそうな声で言っていた。

泣かない桐島はある意味強いと思った。

でも桐島は、我慢し過ぎている気がした。

泣きもしないで、辛いのに誰にも話せなくて、1人で抱え込んでいる……こんな姿……見ているのが辛い。

笑わせてやりたいと思って、俺は桐島と友達になった。

人生が楽しいものだ、教えたいと思って友達になったのに……俺は居ても立ってもいられなくて、思わず桐島を抱き締めた。

「……泉……君……?」

当然、桐島は驚いていた。
でも、もうそんな事気にならなかった。

「我慢しないで泣きなよ、桐島…我慢してると人間なんて、いつか壊れるよ…」

「っ……………」

「俺は…桐島を病人としてなんか見ない…だって、桐島は桐島だから…。俺は、ただ強がって泣こうとしない…弱い１人の女である桐島の…友達なんだ…でも今、なにもしてやれないから…せめて、お前の傍にいさせてもらっよう…」

俺がそう言つと、桐島は我慢するのをやめた。

俺は泣いている桐島の髪を撫でた。

俺に出来る事は、もうこれくらいしか思い付かない。

泣かせて、撫でてやる事しか思い付かなかった。

「……………」

「落ち着いた…？」

桐島がうなずいたので、俺は桐島を抱き締めている腕を解いた。

「……………」
「ごめんなさい…」

「え…なんで謝るの？」

「色々と…迷惑かけて…」

「いいよ、気にしなくて。」

「……ありがとう……」

桐島はそう言うと、俺を見て微笑んだ。

今まで一緒にいた中で、一番の笑顔だと思う。

「あはは…やっぱり桐島は、笑うと可愛い。」

俺の、正直な言葉だった。

気付けば、いつの間にか桐島の髪を撫でていた。

さっき撫でていて思ったのだが、桐島の髪は指通りがよくて、少し柔らかくて触り心地が良い。

——なんか、癖になりそうだ…

「……あ……う……」

桐島の事だから、『触らないでよ…』とでも言われると思ったが、少し赤くなりながら黙って撫でられていたので、余計に可愛く見える。

「…ほ、他の人達は……？」

「俺達、ライブの後はみんなでファミレスとかで食事するんだ。そこに、先に行ってもらってる。」

俺はそこまで言うと、流石に止められなくなりそうなので、桐島の

髪を撫でる手を下ろした。

「……そう……」

「行けそう？」

「……うん。」

桐島は微笑みながらうなずいた。
この分なら、もう大丈夫だろう。

「よし、じゃあ行こうか。」

「……うん。」

それから俺と桐島は、他のメンバーが待っている店に向かった。

- 莉央の家 莉央の部屋 -

俺は家に帰った後、考えていた。桐島の事。

症状から何まで同じ病気だった。

驚いたでは済まないくらい、驚いた。

桐島は、大人しくて、ただ人と話すのを好まなくて、人とつるまな
いっただけだと思っていたけど。

「……まさか、自分と同じ病気の人間が、こんな身近にいたなんてな

…」

俺は今日、改めて桐島を変えてやりたいと思った。
だって昔、俺だって変わったんだ。

“あの女”のお蔭で。

手を差しのべてくれた人がいたから、今の俺がいる。
だから、今度は俺が桐島に手を差しのべる。

同じ病気の俺が今を楽しく過ごせているんだから、きっと桐島も楽しく過ごせる筈だから。

我慢し過ぎる所があつて、実は優しく、でも素直じゃない…他の誰でもない、そんな桐島だからこそ、放っておけない。
そんな桐島だからこそ、助けたいと思う。

——俺は、そんな桐島を好きになつてしまったから。

- 優花の家 優花の部屋 -

私は帰った後、ベッドの上に寝転んでいた。
初めてあんな事…人に話したと思う。
なんだかスッキリした気がする。

「……………泉君に…撫でられた…」

今思い出すと、なぜか頬が熱くなる。
どうして何も言えなかったんだろう…いつもなら、嫌じゃなくても、触らないでよ、くらいは言えるのに。

——何も、言えなかった。

髪を触られて、不思議と心地よく感じた。
同時に恥ずかしかった。

あの時も、頬が熱かった。

抱き締められた時も、なぜか安心して泣く事ができた。
どうしてだか分からなかった。

こんな気持ち、初めてだから…

——正直な気持ち——

- 12月20日 多美丘高校 図書室 -

朝…私は今日も図書室にいた。

今日は雪が降っているので、少し寒かった。

雲で見えない空を見ながら、私はホームルームまでの時間を潰していた。

それから少しすると、ドアが開く音がした。

泉君だった。

いつも通り挨拶を交わしてから、泉君は私の隣に立って、外を見る。

「もう、すっかり冬だな…」

「そうね…」

「そういえば、もう3ヶ月くらい経ったんだ…」

「え…?」

「桐島と知り合ってから。」

そういえば、もうそんなに経っていた。
言われるまで気付かなかった。
秋に知り合ったと思ったら、もう冬になった。

「泉君……冬は好き…?」

「そうだな…寒いし、風邪引きやすい季節だけど、まあまあ好きかな。桐島は、冬は好き?」

「……寒いけど、景色が綺麗だから……好き…」

「そっか。そういえば桐島って、冬が似合う気がする。」

「そうなの…?」

「うん。冬に、綺麗な景色とか見てそう。」

泉君は、私を見て笑顔でそう言った。
それを見ると、私は不思議と笑う事が出来た。

私が席に着くと、美樹さんが私の傍に駆け寄ってきた。
何回か席替えがあり、美樹さんとはすっかり遠くの席になった。
でも、美樹さんは毎朝私の所に来てくれる。

「おはよう、優花ちゃん！」

「うん、おはよう……」

私が少し笑って挨拶を返すと、美樹さんは嬉しそうに笑った。

「優花ちゃん、この頃元気そうだね！よかった♪」

「え……」

「前は優花ちゃん、笑ってくれなかったけど、最近は笑って挨拶してくれるようになったから♪泉君のお蔭かなあ……？」

「え……あ……み、美樹さん……」

「あははっ♪その様子だと、凶星だねえ♪」

「う……」

私が何か反論しようとした時、丁度、チャイムがなった。

「あ…じゃあ私行くね」

「うん…」

美樹さんはそう言つと、席に戻つていった。

- 放課後 図書室 -

放課後になり、今日も私は図書室にいた。

実は明日は終業式で、あさってから冬休みに入る。

だから、しばらく図書室から外を見れないから、少し寂しい気分だった。

そんな私の隣には泉君がいて、一緒に外を見ていた。

「泉君…今日、練習は…？」

「ん？そうだな…今日はサボる」

「え…………駄目よ…さぼるのは…」

私が、怒るように言つと、泉君はクスクス笑つた。

「久しぶりにゆっくりしたいからって、ちゃんと連絡入れておいたよ」

と、泉君は言ったが、淒く言い方がわざとらしい。
私は言ってみた。

「……嘘ついてるわね……」

「あ、バレた？」

……やっぱり嘘だったらしい。

私は、思わず小さなため息を漏らした。

「あれ……怒ってる？」

泉君を見ると、泉君が私を見て小さく首をかしげていた。
その姿が、容姿とは逆に可愛く見える。

「……行かないと駄目よ……」

私がそう言つと、泉君は携帯を取り出し、誰かに電話をかけた。
誰かとの会話を終えると、携帯を閉じる。

「ほら、連絡したから今日は休み。」

笑顔でそう言つと泉君を見て、気付いた。

「……今の……浅井さん……？」

「うん。」

止めるべきだったと、今更ながら後悔した。
また、小さなため息をつく、泉君はクスクスと笑った。

それから、少しの沈黙がくる。
いつもの事だった。

「桐島」

「なに…？」

私は外を見ながら返事をする。

「……………あの…さ…、……………」

「…？」

泉君が不意に口を開くのはいつもの事だが、珍しく泉君が言葉に詰まって、黙り込んでいた。
どうしたのかと思い、私が声をかけようとした時。

「……………ごめん、明日言う…」

泉君は苦笑しながらそう言って、図書室を出て行ってしまった。
何か様子がおかしかった。

——何を言いかけたんだろう。

泉君が気になったが、追いかけるのもどうかと思ったので、私はまた外を見る事にした。

終業式が終わり、放課後になったので、私は図書室に来た。
図書室には、先に来ていたらしく、泉君がいた。

今日の朝は来ていなかったなので、休みなのかと思っていた。

泉君は、外を見ていたらしい。

私を見ていつも通り挨拶をし、私もいつも通り挨拶を返して泉君の隣に行った。

今日も雪だった。

それから、少しの沈黙の後…

「桐島…昨日言いかけた事だけ…」

泉君が口を開いた。

「あ……うん……？」

それから泉君は少し黙り込んだ後に、言った。

「……好きだよ。」

「……えっ？」

「桐島が、好き。」

——今の言葉は…何？

好きって…私を……泉君が…？

「……え……あの…、私……」

ただただ、返す言葉に迷った。

「いきなりごめん……。桐島の正直な気持ちが聞きたい。冬休みが終わった時でいいから、その時に、答えを聞かせてほしい。」

泉君は苦笑してそう言った。

私はとにかく返す言葉が見つからず、うなずく事しか出来なかった。

「じゃあ、練習あるから。」

泉君はそう言つと図書室から出ていった。

「……泉君……」

——頭の中が、真っ白だった。

- 優花の家 優花の部屋 -

家に帰って、ベッドに寝転んで考えていた。
もちろん、泉君の事。

「……告白………された……」

別に、初めてではなかった。

中学生の時、何度か告白された事はあった。

だけど、どれもただの言葉にしか聞こえなくて、好きだと言われても、私の心には響かなかった。

だけど、今回は違った。

——桐島が、好き。

たったこれだけの言葉。

頭の中で、何回も繰り返されていた。

そして、繰り返されるたびに、頬が熱くなってくる。

「……………どうしよう…」

多分…私も泉君が好きなんだと思う。

だけでもし、私も泉君が好きって言って、もし付き合う事になったら…。

泉君は、私が独り占めしていい存在じゃない。

みんなの人気者で、歌手で…有名人で、格好よくて、優しくて、でも少し抜けてるところがあつて…私では、とても釣り合わない、いい人。

だからあの時、素直に返事を返せなかった。

本当は素直に返事を返したい…だけど泉君は、私よりいい人と付き合う事ができる…。

私みたいに病気じゃなくて、もっと美人で可愛くて、いつも笑顔でいてくれるような人とか…。

泉君は、私なんかが好きになっていい人じゃない…。

——不意に、ドアを叩く音がした。

その後、ドアが開いたので、ドアの方を見た。

そこにいたのは、お母さんだった。

「……………お母さん…」

「もう、何回呼んでも下りてこないんだから。」

「ごめんなさい…」

「あら…優花、顔赤いけど熱でもあるの？」

「ううん…」

「そう？花梨がお腹空かせて待ってるから、早く下りてきなさいね？」

私がうなずくと、お母さんは下りていった。

それから少ししてから、とりあえず私も一階に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9022x/>

Live...

2011年11月12日18時43分発行